批評及び紹介

石綿と火鼠

東西俗傳の比較研究

ベルトルド、ラウフェル

Asbestos and Salamander.

By Berthold Laufer. T'oung-Pao, vol. XVI No. 3. (Juillet 1915), 299－373.

支那古來の通俗傳說が何處まで固有のもので、何處まで外來の影響であるかはラウフェル氏が近時愛好の研究題目である。本篇も註題にAn Essay in Chinese and Hellenistic Folklore と斷はつてある通り支那の俗傳と西洋の其れとを比較考究した結果であつて、幾分通報前號に掲載の同氏の論文「火珠」Optical Lenses (Burning-lenses in China and India) と姉妹篇の關係を爲すものである。火浣布と云ふ珍奇異寶、之に對する支那人の驚異は多くの浮說俗傳を生み出だしたが、其れが果して支那人獨創の構想であつたらうかどうか、此れの究明が本篇の主眼である。ラウフェル氏は劈頭に此事を說いて「本篇の目的は石綿と其應用の歷史を說くのではない、此不思議な產物に關する支那人の傳說を解釋し、之を其れに相應するギリシャ・ローマ・シリヤ・アラビヤ及び中世ヨーロッパ人の思想と關聯說明するにある」と云ひ、「此の全然西洋思想に基づく支那人の傳說は西方俗傳に對して適當なる參酌考察を拂はなければ到底解すべからざるものである」と云つて居る。全篇七十

五頁分つて緒言以下十一節と爲し、之に丁寧なる脚註を施した雜誌論文としては可成りの大作で、漢文の本文の飜譯には時に白璧の微瑕とも見受けらるゝものが無いでもないが、勿論論證の筋道を誤らしむる程大なる缺點では無い。今左の紹介には努めて原意を失はざる事を期したけれども、摘要省略の必要上必ずしも氏の說明法に從はず、極めて大意を取つて略述した點が多い。若し誤解を傳へて罪を氏に獲ること無くんば幸である。

ラウフェル氏によると此題目に就いては既に A. Wylie 氏があり、先きに一八九七年上海出版の Chinese Researcles の中に Asbestos in China と云ふ論文を書いて居る。此論文からラウフェル氏が少からぬ利益を得た事は氏が第一に感謝して居る所であるが、實を言ふとウィリー氏の最初の試みは單に支那の資料を蒐集し、僅に「支那人も石綿で織つた手巾の類に就いて述べて居るからギリシャ・ローマにも是れがあつたと言ふ所傳は立證せられる」と結論したに留まり、其れに關する夥しい俗傳の事は「初め支那人は石綿を鑛物と思はず、動植物の所產と考へた程で其俗傳は信用出來ぬ」と評し去つて、東西の交涉比較傳說學の分野は之を全く未開の儘にラウフェル氏に殘したのである。ラウフェル氏は「一世代後に出て最近科學の進步殊に P. Pelliot 氏等による必要なる地名の比定の成果――此問題に於て思想傳播の徑路を示す地理的見解は必要不可缺なものである――は自分の研究をしてウィリー氏に駕して登る事を頗る容易ならしめた」と云つて居る。

本論の第一節はギリシャ・ローマに於ける石綿に關する所傳の列擧で、Aristotle の高弟 Theophrastus 以下 Strabo, Dioscorides, Apollonius Dyscolus, Pausanias, Plutarch より Pliny に至るまで網羅し悉された說の中には稍〻珍奇な異聞も無くはないが、要するに「此時代は實際に於て石綿產出の狀態を知り、――

當時知られたる石綿の産地は主としてギリシャ内のCarystus, Arcadia 及び Cyprus であつた――其效用に就いて眞率なる記述を爲した」のに過ぎない。ラウフェル氏は此節の結びに「古代の記述は甚だ平明であると共に不完全である。石綿の發掘火浣布の紡織共に其仔細を知る事が出來ないが、夫れよりも注意すべきは石綿の不思議な性質及び起源を說明する憶說が當時未だ起らなかつた事で、プリニーの中に石綿が印度に產し熱帶的炎暑の下に其耐火力を養はれたものであると見えるのが僅に其萠芽と認むべきだが、其れすらプリニー一個の私見で當時の通說では無かつたのである」と述べて居る。諸說に通じて力說せらるゝ所は當時石綿で作られた手巾衣服燈心の類があり、其の汚れた時には火中に投じて洗滌せられたと云ふ一事である。今當時の火浣布はイタリヤに發掘品として僅に其三を存するのみださうであるが、嘗ては是れが支那に入つて盛にもて囃されたのである。

第二節には乃ち此の石綿の支那輸入を說く。ラウフェル氏によると『支那人は初めて Roman Orient 即ち大秦との通商によつて石綿を知つたのである。西曆二三九年から二六五年までの間に出來た魚豢の魏略に火浣布を大秦名產の一として擧げたのは此事が正しい記錄に見えた最初であつて、其後後漢書（百卷十八）晉書（卷六十七）宋書及び景敎の碑などにも此事を傳へて居る。列子及び周書に周の穆王のとき西戎が昆吾之劒（切玉刀即ち diamoud-poiuts）火浣之布を獻じたとあるのは勿論信ずべからざるもので、偶〻以て火浣布が「がらすきり」と共に漢代に――列子の出來たのは漢代である――大秦から中央アジヤを經て陸路支那に入つたことを語るのみである。ヴィリー氏は拾遺記（卷九）の中に羽山の民が虞舜に黃布（前後の關係からその火浣布であることは推測される）を獻じたとあるのを火浣布に關する最古の記事と考へたやうだが、拾遺記は同氏も言つて

居らるゝ通り史的價値の乏しいもので、第四世紀の晋の王嘉が手に成り、それも散佚して今に傳はるものは原本ではない。假りに此條の記事を王嘉に遡り得るとしても、以て吾人の信念を確むるには足らないのである。蓋し信ずべき記錄による限り、支那に石綿の產したのは西紀以後の事で、石綿に關する支那人の考と云ふものは大部分西方俗傳に基いて居るのであるから（此事尙ほ後出）、――火浣布と云ふ名が既にギリシヤ・ローマの古傳を聯想せしめる――支那人は大秦と接觸するまで石綿を知らなかつたと斷定出來る。拾遺記の所傳も火浣布が西域から來た事を示すのみであらう。火浣布の貢獻が最も精確に傳へられたのは魏志卷四に齊王芳の景初三年（239）二月「西域重譯獻火浣布、詔大將軍太尉臨試、以示百寮」とあるもの是れである。第四世紀後半の傅子（魏志卷四裴松之の註所引）によると是より先き後漢の桓帝の時、大將軍梁冀が宴會の席上其火浣布製の單衣を火中に投じて衆を駭

かしたと云ふ事が傳はつて居り、晋の干寶の搜神記（同上）によると其後西域の火浣布貢獻が久しく絕え、曹魏の初めには其實在を疑ふものが出來、文帝丕の如きは「典論」を著はして其不合理を辯じ之を否認し、次ぎの明帝叡は典論を石に刊して其卓見を贊したが、忽ち次代齊王芳の世に復た火浣布の來獻があつて折角の卓論も事實の前に打碎かれて了つたとある。兎も角も漢代及び第三世紀間を通じて支那人は石綿を只〻石綿として受取り其妙用を稱したのみで、其の不可思議なる性質及び起源に關する說明は之を試みざると西洋上古の諸說と同じであつたが、第四世紀に入り晋初に葛洪が出づるに及んで怪奇なる俗傳を生ずるに至つた。而もこれは西方に於ける思想の變遷と相照應して居るのである。殊に支那に現はれた火鼠なるもの――其毛から火浣布を作ると云ふ――は西方思想の Salamander の變形であるから、前者を間違なく解する爲めには先づ後者の發展の跡を尋ね

なければならぬ』と云つて、ラウフェエル氏は次節に移る。

第三節以下數節は西方の俗傳に現はれたるサラマンダーの發展である。ラウフェル氏の大意に曰く『サマンダーに就いてはギリシヤ・ローマに於てアリストートル・テオフラスツスに初まりAelian. プリニー等の書にも見え、想像の動物は記述の間に小異を免かれぬけれども、要するに火中に生じ若しくは火中に棲息する蠅或は蜥蜴に似た小動物であつて、如何なる烈火の中でも毫末の傷害をも感じないものである。此傳說はアリストートル・テオフラスツスに於ては不確實なる傳聞であり、殊にプリニーは之をペルシヤの僧道(マジ)の迷信に關聯して說いて居るなど、どうもO. Keller氏も考へたやうに、サラマンダー傳說の本源は近東に在ること、思はれる。プリニー及びエリアンの說は確かにアレキサンドリヤのPhysiologusから出たもので、フィジオローグスの第三十一章及びエジプト僧HorapollonのHieroglyphicaに、爐火に入つて火を消すと云ふサランマンダーの事が出て居るのから見れば、此の傳說が早くも一二世紀頃からエジプトに行はれて居た事は間違ない。更にフイジオローグスの第七章には夫の火中に生死する怪鳥のphœnixの事を說いて居る。asbestosとsalamanderとphœnix、均しく烈火に傷られないもの丶三幅對である。但し上代に於ては此三者の傳說は截然と區別され未だ混同せられなかつた。其混同の表はれたのは中世のアラビヤに於てゞある。

d'Herbelotによるとsamandar即ちsalamanderの事は近東作者の說に一致を缺き、或は其毛から火浣布が出來る貂鼠の一種とし、或は刼火中に生滅する一種の鳥若しくは蜥蜴に似た虫類など丶せられて居るが、此の不可思議の混同はDamirī (1344-1405)のHayāt al-hayawānに至つて頂點に達し、其れにはフェニックスを指してサラマンダーと呼び、之を狐か貂

に似た動物として、石綿は其れから取れると云つてある。Damirī は先人の所傳に據つたもので、既に第十世紀の Adjaib al-Hind (The Wonders of India) 書名十二三世紀の Yāqūt 人名などの中にも其片影が見える。斯くして支那人の所謂火鼠と同じきものがアラビヤ人の間でも發見せらるのである。中世ヨーロッパに於ては salamander-phœnix の傳說は大凡十世紀十一世紀の頃アラビヤ人の手から輸入せられて以後盛に行はれた。此迷信を打破した者は實に Marco Polo 其人であつて、彼れは asbestos を意味するに salamander の語を用ゐたけれども、其の地中より發掘さるる物質であつて動物性のものでない事を力說し、蒙古大汗の許に於ける確實なる見聞によつて石綿發掘の狀と火浣布紡織の方法とを細說した。其後之に刺戟されて A. Boetius de Boot (1636), A. Kircher (1670), John Ray (1693) 諸氏が出てヨーロッパの石綿說は十分なる科學的論述を得たのである。』次ぎにラウフェル氏は近東のアラビヤ・ペルシャ人が能く石綿を知つて居り、殊にアラビヤ人が Badakshān 產の石綿の知識を持つて居た事を說いて、中世の支那が此方面から石綿の供給を仰いだ爲めの伏線を爲し、本論の第七節には一轉して支那に於ける Salamander-asbestos の傳說を說いて居る。氏は先づ支那に於ける石綿傳說發展の三階段を概說して「第一は漢代から第三世紀に涉り史實的信仰（ヒストリカル・セント・オブ・ビリーフス）の時代と名づくべく、ギリシャ・ローマの俗傳と一致して居る。第二は四世紀の初から宋末に及び空想的時代（ロンマンティク）であつて、中世ヨーロッパ・アラビヤの思想と相適ふものである。第三は元代に初まり實際的若しくは科學的（リアリスティク）（サイエンティフィク）の時代であつて、支那の地に於ける石綿の實際的發見に基づいて居る」と云ひ扨其本題に入る。

『支那に於て初めて石綿の起源性質の說明を試みたのは晉の葛洪(249—330)であつて抱朴子に

火浣布有三種、其一曰、海中肅邱有自生火、春起

秋滅、洲上生木、木爲火焚不糜、但小焦黄、人或得薪、俱如常薪、但不成灰、炊熟、則以水滅之、使復更用、如此不窮、夷人取此木華、績以爲布、一也、又其木皮赤剝之、以灰煮治、以爲布、麤不及華、俱可火浣二也、又有白鼠、毛長三寸、居空木中、入火不灼、其毛可績爲布、三也、（宋高似孫緯略卷四所引）

とある。三種の火浣布の中、前二種は姑く措いて第三種に白鼠とあるのが、西方傳說のサラマンダーに外ならない事は確かである。蓋し葛洪の記述が年代に於てアラビヤの傳說に遥かに先立つ事は一見不思議のやうであるが、夫れも合理的に說明出來る。若し此傳說が本來支那に起り支那から西アジヤに擴がつたと考へるならば、支那には何等その基礎たるべき事實がないのに、西方には Salamander と Asbestos の聯結から論理的發展の痕を尋ねる事が出來るからである。また葛洪の記述には多くの旁證があつて之を時代錯誤の信ずべからざるものとするのは難かしい。三國の時代に出來た張勃の吳錄に早くも「日南取火鼠毛爲布、名火浣布」とあると傳へるのは（太平御覽卷八百二十及び緯略卷四）、寧ろ信じられぬ。既に此事ありとすれば葛洪が却つて日南Tonkingの地名を逸して居るのも怪しいし、當時は正しく火浣布の知られた時代で魏志に西域の貢獻として記錄されて居るのに、其處にはサラマンダー傳說の影も傳へて居ないのも變である。此傳說の支那に傳はつたのは早くも三世紀の終りか四世紀の初めと言ふことが出來やう。けれども葛洪と同時代の郭璞(276－324)が此傳說に論及して居るのは面白い。山海經（卷十六大荒西經）の註に

今去扶南東萬里、有耆薄國、東復五千里許、有火山國、其山雖霖雨、火常然、火中有白鼠、時出山邊求食、人捕得之、以毛作布、今之火澣布是也、

とある。耆薄は卽ち闍婆で今のJavaの古名であるが、後出其の支那に知られたのは五世紀の前半劉宋の元嘉十年以後の事であるから、晉の郭璞が之を知りやう

筈はない。此點は確に後の攙入であるが、其他の條は全く郭璞のものであらう。其譯けは此地理的記述は三世紀中、吳の孫權の遣南使節康泰の所傳によつたもので、其事は葛洪も同じく、たゞ郭璞の方がもつと精確に地理を示したばかりであるからである。康泰によつて述べられ葛洪によつて繰返された植物性の石綿の事を郭璞は避けて、專ら康泰の知らなかつた白鼠卽ちサラマンダーの事を述べたのである。葛洪は地理を定めなかつたが、郭璞はサラマンダー傳說を採つて之を康泰によつて報告せられた火山島にと置いた。されば郭璞の說は西方のサラマンダー說と扶南の火木說との仲介を爲して居る。但し是れは何等火鼠傳說輸入の徑路を語るものではない。火鼠傳說は康泰の所謂木の石綿――實は石綿とは關係のない只の木皮布――の產地なるマライの火山島から來たのではないのである。尙ほ郭璞がサラマンダーを知つて居た事は爾雅の註に十龜の一火龜を解して「猶火鼠也」と云つて居るのでも解る。火鼠は爾雅に無い名で卽ち初め支那人に知られず、郭璞の時代に初めて知られたものなのである。其他同じく四世紀中葉の崔豹の古今註には略抱朴子と同說を載せ、且つ神異經を引いて更に荒唐なる異傳を揭げて居る。神異經は漢の東方朔の書と稱するけれども、其然らざるは定論があり、此條の記事は康泰の所傳に基いて居る所から見ると三世紀以後のものでなければならぬ。誤つて東方朔の作と云はるゝ書には他にも此傳說を誇大敷衍したものがあつて、○恐らく十洲記のことであらう當時の火鼠說中には稍〻溫和なものと道家思想で誇張されたものとの二種あつた事が知られる。更に唐の張說の梁四公(子)記によれば梁の諶柔が火浣布の三種を識別し植物性の二種は僞物である事を知つて居たと傳へて居る、○紹介者曰ふラウフェル氏は梁四公記の文を格致鏡原から孫引し之を緯略所引の文と比較して居らるゝが、說郛所收の四公記の本文によれば僞物を試驗した條の記事が見えない。又氏は四公記に「洲中有火木、其皮可以爲布、炎丘有火鼠、其毛可以爲裀、皆焚之不灼、汚以火浣」とあるのを木皮製は只の布で鼠毛製のみが火浣布だとの意に解して木皮製僞物說の一證として居らるゝが、これ

は皆と云ふ字を見落された誤解でらう。僞物の試驗と云つても木皮は之を燒けば常を改むとあるばかりで灰になつたと云ふでもないから、一概に僞物と排し去るのも如何なものであらうか。此一條は後の所謂扶南の火木說起源の證明の根底を爲すものであるかからこれは稍々重大な疑惑である。因みに梁四公記をラウフエル氏が必ず梁四公子記と云つてるのは何かの思ひ違ひであらう。

以上の列擧によつてsalamander-asbestosの傳說が四世紀から六世紀に掛けて支那に一般に行はれて居た事は十分に解る。而して此支那の記錄は丁度西方に於て上代末からアラビヤ・中世ヨーロッパの時代に抵る間の傳說の間隙を充たす者である。支那の記錄が凡てアラビヤの其れに先立つて居るのから見ると、支那人とアラビヤ人とは必ず少くも第三世紀中に西アジヤに存した或る共通の本據から其傳說を傳へたのに相違ない。此典據は未だ解らないけれども、是れなくしては此問題を解く事が出來ない假定であり、西方の記錄によつても其典據は紀元後間も無く近東に生じたものと推せられる。サラマンダー傳說——未だアスベストスと結び付かない——の本源は近東にあるらしく、プリニーも之をペルシヤの僧道に結び付けて居る事、紀元一世紀頃此傳說はエジプトに行はれて居り、プリニーやエリアンの說はアレキサンドリヤのフイジオローグスに據つたものである事は既に言つた。さればエジプトからペルシヤに掛けた地方には夙に此傳說が知られ、若し他の形に發展しないまでもフィジオローグスの多くの飜譯が廣く行はれて居た事は信ずべきである。而も火浣布が當時西アジヤに存し、其處から中央アジヤを經て支那に輸入せられた事は支那の記錄から知られる。salamander と asbestos とを熟知して居た大秦人は之をやがて支那に傳へ、又後にアラビヤ人の間に現はれた salamander-asbestos の傳說を造るだけの要素を備へて居たのである。其確實の本據は未だ判然しないが傳說の萠芽とも見るべきはギリシヤの Antigonus の Wonderful Storiesの中に見える。アンチゴヌスは紀元前二九五年乃至二九〇年に生れたカリスツスの人で、其のサラマンダーの說は大體アリストート

ルに據つて居るが、更に此動物がカリスッスの火爐の中にも生ずると云ふ事を傳へて居る。Euboeaの Carystus はアポロニウス・ストラボー等によれば石綿の主産地であつて、爲めに石綿の一名を Carystus とさへ呼ぶといふ。アンチゴヌスは或は其故郷に於ける石綿發掘の狀を知つて居つたかも知れない。勿論彼れは石綿に就いて論及した證據はないが、其記述を讀んだ東方のギリシャ人シリヤ人アラビヤ人——Carystus を即ち asbestos の同義語と心得て居た人々は忽ち石綿を聯想し、單なるサラマンダーの論述が輙ち兩觀念の連結を促した事であらう。斯くして我等は二世紀若しくは三世紀當初にギリシャ文化の地に起つた筈である Salamander-asbestos混同傳說の起源に就いて稍々滿足の行く關鍵を握るのである。尙ほ梁の沈約の宋志格致鏡原所引によれば「炎洲在南海中、有猛掘獸、人捕之、斬刺不傷、積薪烈火、縛以投火中、而此獸不焦」とある。猛掘獸は一種の蜥蜴であるから支那にも鼠の形に於けるサラマンダーの外に、西洋上古と同じく蜥蜴としてのものもあつたので、抱朴子の中に「居空木中」とあるのも實は蜥蜴の性質を暴露したものに外ならない。支那人が Salamander-asbestos 說を傳へるのにアラビヤ人からせなかつた事は後者に於ては重要の要素なるフェニックスの事が前者には缺けて居るのでも肯づかれる。晉の干寶の搜神記の中には「崑崙之墟有炎火之山、山上有鳥獸草木、皆生於炎火之中」とあるが、其鳥は一般的のもので到底フェニックスに比定すべくもない。扨てサラマンダーの說が支那人に傳はつたのは明かであるが、其語は嘗て採用せられず、淸初の Ferdinand Verbiest の坤輿圖說に至つて初めてヨーロッパに傳はるサラマンダーを說明する爲めに撒辣漫大辣の字面が用ゐられたのである。

第八節には石綿の植物起源說の解釋がある。是より先きラウフェル氏は第一節の末尾に於てプリニー

の中に石綿植物説があると云ふ見解の妄を辯じ、却つて其れが近東に現はれ、古くはギリシャのAlexander Romanceに、後にはアラビヤのAbū Dulaf (941)などの中に見える事を論じたが、是に至つて支那の植物起源説を解くために一轉して之を扶南Cambodjaの地に求めた。曰く『第三世紀の前半吳の孫權の使節康泰朱應等は扶南に使したが、其の齎した報告は支那の史家に多くの材料を呈供した。其事の最も多く採つてある梁書には卷五四海南諸國扶南國傳に石綿に關する異傳を載せて

又傳、扶南東界即大漲海、海南よりmalacca海峽に至る今の支那海海中有大洲、洲上有諸薄國、瓜哇國東有馬五洲、Pelliot氏よれば今のBaliか復東行漲海千餘里、至自然火州、今のTimorか其上有樹生火中、洲左近人剝取皮、紡績作布、極得數尺、以爲手巾、與蕉麻無異、而色微青黑、若小垢涔、則投火中、復更精潔、或作燈炷、用之不知盡、

と見える。本文の內容は實はマライ人ポリネシヤ人に普通なるbast-clothの事を語つて居るもので、火浣布と似ては居るが決して燃えないものではない。其れが火浣布と考へられ火浣の事と燈心の話とが附け加へられたのである。此兩者を結び付けたのは果して康泰自身であらうか、それとも彼れは單に扶南の傳說を傳へたに過ぎないだらうか。康泰は扶南で中天竺の使節陳宋に逢つて居る。印度と扶南とは密接の通商關係があつたから、康泰の行つた時分扶南には石綿の知識があつたに相違ない（唐書卷二二一。梁書卷ヵ四）。マライ地方の土人に石綿は發見も利用もせられなかつたのに、印度は東晉の太元五年に火浣布を支那に貢し、プリニーも印度を石綿の產地とし、アラビヤ人はバダクシャンから石綿を得て居る。されば石綿が三世紀初頃印度から扶南に輸入されたと云ふ事は假定出來やう。康泰が扶南で石綿に關する正しい概念――ギリシャ・ローマの所傳に一致する概念を得て來たのは其證據である。但し何處でもさうであつたやう

に扶南でも石綿の産出は希れで、供給は需要に應じきれなかつたから、狡猾なる扶南人はマライの木皮布を以て石綿と名けて貿易する奸策を弄したのであらう。康泰の記事石綿の植物起源説に關する部分は斯く解するに非ずんば解する事は出來ない。南海の火浣布の一例は前述の梁四公記に見えて居て、木皮布が火浣布の銘打つて實際支那にまで輸入された事を示して居る。

梁書の據つた火木説　○紹介者曰く即ち康泰の所傳である、ラウフエル氏は梁書の記事を全く康泰の所傳と見るが故に以下にも後出の梁書によつて前出の諸傳を論ずることが多い。の影響は四世紀の道家者流に限らず、唐代の玄覽にも見えて、是れには「毗騫有燃火之洲、有木可績、是謂火浣之布」格致鏡原所引と ある。毘騫は梁書扶南傳に大海洲中、扶南を去る八千里に在ると見ゆるもので、Pelliot 氏によれば今のIrawaddy の沿岸印度洋に面した地方であるらしい。但し梁書の火山島は遙かに東方マライ群島中にあるので、毗騫とは關係なく玄覽の所傳は間違つて居る。

梁書の諸薄が今の爪哇である事は異物志に「斯調國有火洲云々」とあるに依つても證せられる。異物志の記述は梁書の本文によつた者であるのに、斯調は疑もなく葉調の誤植であつて、葉調は爪哇の古名梵語形のYavadvipa であることペリオ氏の言の通りであるからである。異物志の所傳の面白いのは火山の火と火木と互の盛衰に因果關係を立した點にある。尙ほ梁書の原文に基づいた者には五世紀中郭氏の玄中記、六世紀初頭梁の任昉の述異記があり、述異記の文は文獻通考に引いてある康泰の扶南土俗　○説郛また之を收む　に關係を持つて居る。其他後魏の楊衒之の洛陽伽藍記には車斯恐らく事師で即ちTur-fan-Dsimsuであらう、の國で木皮製の火浣布を産する事を傳へてある。植物性起源説は未だ澤山にあらうが是れだけでも十分に此説が最初康泰に起り、サラマンダー説と矛盾するに係らず深く支那人の心に植へ付けられた事が解る。火鼠毛説は疑もなく西方に起つたものであるが、植物性説はさうでな

いらしい。プリニーに其說があると云ふのは勿論間違で、Alexander Romanceやシリヤの作物に此事があるのは寧ろ聯絡のない孤立した現象に過ぎない。石綿の細線は麻類の纖維に酷似して居るから、自然に兩者を結び付ける說も隨所に起るので、現に我々の間にも之をMountain Wood (liguiform asbestos)などゝ呼ぶ名があるのは其例證である。○紹介者云ふ、英語のearth-flax獨語のFlachsstein獨語のsteenvlas (stone-flax)等は正しく支那語の石絨邦語の石綿に當り稍々上と同じき聯想によつたものである。因みに火鼠の名は其傳說と共に早く我國に輸入せられ既に竹取物語の中にも「ひねずみの皮云々」の語がある、ひねずみとは火鼠の語の訓讀である。

たゞアラビヤや中世ヨーロッパの人は石綿とサラマンダー・フェニックスとの比定に急であつた爲めに此說は起らなかつた。Martiniの Atlas Sinensis の中に稍々其萌芽の見ゆるのは支那から傳へたものである。さてそれでは此說がどうして扶南で起つたかを次ぎに說明しやう『と云つて、ラウフェル氏は節を改める。第九節は火山說の說明である。

『火山が石綿の構成を來すと云ふ思想はどうして起りどうして發達したか。其れには康泰によつて宣傳された火山說の外に尙ほ一二の異說がある。拾遺記には晉の武帝の太康元年羽山の民が使を遣はして火浣布を献じた事を記し、「其國人稱、羽山之山、有文石生火、烟色以隨四時而見、名爲淨火、有不潔之衣、投於火石之上、雖滯汚漬湟、皆如新浣」とある。其傳甚だ奇にして且つ難解であるが、不潔の衣は必ず石綿を云つたに相違ない。火浣布が何故火山の火で淸められる必要があるかは理由がない。事實は石綿其物が問題の火山から產出され、噴火の作用が其れに暴されてる石綿に耐火力を賦與した云ふ意であつたらう。山海經によると昆侖の外に「有炎火之山、投物輒然(モエ)」とあり、搜神記には此昆侖の火山から石綿が取れると云つてある。されば支那の傳說には一は康泰の傳へたマライ群島東部の一島と、他は中央アジヤ方面と二箇所の石綿を產する火山が知られて居たのである。併し此等の地方の何れからも石綿は出な

いから、結局支那の記錄の火山說は直接の觀察に據つたのでなく机上の想像に成つた結果であると云ふ事が解る。但し其想像の奧には正しい觀察の根底があつて、是れが思想上の分子を結合する基になつたのである。

實は石綿と火山とを聯想するのは間違でなく、最廣義の石綿中には輝石と角閃石とを含み、兩者は殆ど凡ての火山岩の組成分たるのである。けれども支那人が之を知つて居たとは云へない。アジヤの火山には嘗て石綿を產したものはない。火山を持つて來たのは困難な石綿の說明の隱れ家たるに過ぎない。之れはさう考ふべきでなく、支那の自然哲學によつて發達し、外國傳來の怪說によつて養くされた思想から解釋すべきである。康泰が其說を支那的敎養に負ふか或は直に扶南から借り來つたかは決し易くない。吾人はたゞ其中火山の事は扶南で作られたと確信する。蓋し火山は支那になく此種の支那の記事

は凡て海外に關係して居るからである。傳へられてる織物は火中に耐へる。而して此不思議を說明するに熱心な心は此性質が天然火力の作用によつて生じたに相違ないと考へた。本來火に慣れたものは自然に耐火力を備へるとはプリニーにも起つた思想である。扶南の人々はマライ諸島に渡つて火山帶に繁茂する植物を見、其の噴火に耐へるのを見た事であらう。噴火に害せられない植物は地下の火を吸收して耐火力を備へた事と思ひ、火山島の住民が木皮の織物を作る事實によつて想像は容易に、耐火力ある石綿の纖維は火山島の植物から採られたと思つたであらう。西洋上古にも西アジヤ・インドにもさう云ふ思想はないのであるから、斯かる假說は扶南で作られたと見るのは大に當つて居る。康泰の報告は國人に採用せられ大秦傳來のサラマンダー說と共に道家の想像で融合せられたのである。噴火中に生くる植物がありとすれば火中に住むサラマンダーが其中に住めな

い道理がない。斯く考へた郭璞は植物を斥けて火鼠を採り、之をマライ諸島の火山中に置いたのである。搜神記の著者は康泰の說をも生かし郭璞の說をも採り、動植物共火山中に住み石綿は木皮鳥羽獸毛凡てから取れると折衷した。而して宋の王懋は之を可とし「木皮鼠毛皆可爲布也」（野客叢書）と云つたのである。』

本論の第十節最終の節には支那の地に於ける石綿の發見を說く。『後漢書卷七六西南夷傳末尾の論に其の貢獻の盛な事を說いて「其貢輸火毳馴禽封獸之賦輸積於內府」と曰ひ、其註に「火毳即火浣布也、馴禽鸚鵡也、封獸象也」、とある。毳の字は早く詩經に現はれ鳥の毳毛（ウヨウ）や獸の下毛で織つた衣裳の義である。支那人は斯る織物を南方支那の原住民の所產と認めた。E. H. Parker 氏は嶺南異物記を引いて南支那の諸酋が鷲鳥の毳毛を白布の糸に雜へて上等な上被（臥床の）を作る事を述べ、雁の毳毛の衾は支那では夙くから知られて居たと云ひ、D. I. Maggowan 氏も其の趣味多き論文 Chinese and Aztec Plumagery の中に廣東見聞新話（New Conversations on things seen and heard at Canton. By a native of Su-chou）を引いて南蠻の間に於ける毳類の事を述べて居る。廣西の儂族は此種の織物を出すを以て知られ、鄰露の赤雅（知不足齋叢書內）には鳥章の題下に鎖袱と鵝鬬との別が辨じてある。されば火毳とは西南蠻から來た石綿で耐火の毳の義を示し、蠻族の間に行はれて居た傳說を反響して居るのであらう。他に所見なき此特別なる一語が用ゐられただけで右の推論は支へられる。勿論蠻人自ら石綿を織物にしたとは主張出來ないが、少くも其原料を獲て居た事は疑ない。後代明の楊愼（1488－1559）が「火浣布出蜀建昌、其白如雪、出於石隙、元史所謂石絨也」（格致鏡原所引庶物異名疏）と云つて居るのは此推測を確かめる。楊愼の言で明かに指示された石綿產地は F. P. Smith 氏が四川の茂州と云ふのと適ひ、茂州の東北は漢代の西南蠻白馬氏の地であるか

ら、火毳を獻じたのはウィリー氏が考へたやうに冉驪ではなくて白馬氐であらう。未開の民が石綿を知つたと云ふには何の不思議もないので、往々地表に露出して居る此礦物は偶然未開人に發見せられた例も記錄に見ゆるのである。P. S. Pallas氏は一七七〇年Yekaterinburg地方のトルコ部落Bashkirが石綿山を發見して居た事を傳へ、D. Cruntz氏はEskimoが石綿利用の著しき例である事を傳へて居る。マルコポーロによれば蒙古人が盛に石綿を發掘し利用して居た事が解り、蔡絛の鐵圍山叢談（知不足齋叢書內）には宋の時御府でアラビヤ輸入の石綿原料を紡織する事が試みられたが、成功しなかつたとある。（○紹介者曰ふ、此條ラウフェル氏の誤解にして叢談には此事成功し火浣布多くして貴ぶに足らずなつたとある、元代の石絨紡織は恐らくは之に引き續いたものであらう。）蒙古時代の石綿產地を明白に傳へたのは元史である。卷二〇五阿合馬Ahmed傳に同人が長官たる制國用使司が奏して「布格齊山出石絨、織爲布、火不能然、請遣官採取」と曰つたと見え、本紀によれば時は至元四年冬十月の事で世祖忽必烈は之を嘉納したのである。石絨が即ち火浣布なるは楊愼の言つた通りで、布格齊山の地はウィリー氏は之を比定し得なかつたが、G. Schlegel氏は別怯赤山をred mountain of Pie-kiehと譯し、之を四川の中、北緯二七度一二分東經一〇二度五三分の地に置いて居る。（○紹介者曰ふ、布格齊山の字面は乾隆の改定本の用ふる所で、元史の本文には正しく別怯赤山に作り即ち同一の山名である。シュレーゲル氏の意譯は却つて當つて居ない。尙ほラウフェル氏は乾隆本によられたやうだから阿合馬の名も阿哈瑪特になつて居た筈である。）

A. Williamson氏(1868)は山東から石綿の出る事を傳へた最初の歐人であらう、（其後A. Fauvel氏も之を傳へた、）King-kwo山とLaw-sze山から石綿が出て種々耐火用に利用せられて居ると云ふのである。氏は支那人が之を何と稱したかを傳へなかつたが、F. P. Smith氏は不灰木の名を傳へ、山西の潞安府、直隸邁化州の玉田縣、四川の茂州を其產地として擧げて居る。尙ほ龍骨泥を石綿とするのは誤であるが陽起石は確かに石綿の一別名である。但し明の李時珍の本草綱目には不灰

木の項を掲げながら火浣布の事には論及して居ない。蓋し不灰木は一礦產であり、火浣布は織物であつて兩者の所傳は全く別なからである。マルコポーロが西洋の俗傳を破つたやうに支那でも明代の學者には元以來發見の石綿と火浣布の同一を認める者もあつたが、覺醒して古傳說に批評的態度を取つたものはない。實地觀察に馴れず其れに基づく論理的判斷を能くせなかつた支那人は特に古來の傳說に反對する事を知らず、領內に於ける石綿の發見も遂に一般の誤信を醒すにたらなかつたのである。自ら火浣布の一片を見た淸の周亮工さへ「昔人以爲炎山木皮所織、又有以爲火鼠毛者、以爲木皮者近是、以其色似麻苧不類褐罽也」と云つて居る。○龍威祕書所收閩中記卷上 たゞ宋の蔡絛のみは實際何物であつたかは知らなかつたが、明白に鼠毛說を排して居る。鐵圍山叢談によるに當時は石綿の原料はアラビヤから輸入せられ「御府使人自紡績」と云ふから、宋の學者は眞實の知識を得たのであらう。蔡絛は「大抵若今之木綿布、色微靑黧、蓋投之火中、則潔白、非鼠毛也、御府使人自紡績巾褥布袍之屬、多至不足貴、亦可證舊說之譌、」と確言して居る。』

（五、一二、一六、　和田　清）